

### 澁谷耕一 ソリッキービジネスに聞く

記念の第10回を迎えた「地方銀行フードセレクション2015」。その名の通り、地方銀行主体の世界にも類をみない画期的な商談会だ。今年は「地方創生」をテーマに、過去最大規模の582の出展社を集めた。同商談会を立ち上げ地方活性化に取り組んできたソリッキービジネスソリクション澁谷耕一社長に日本の現状を打破するこれからの商談会の役割を聞いた。(山田由紀子)

12、13日に開催する。

第10回「地方銀行フードセレクション2015」は、地方銀行64行のうち41行が主催行として参加。出展社数は582、小間数611で過去最大規模となり、それが金融機関の

ビジネスにどれだけ結び付くのか」と懐疑的な声が強かった。ところが9年前とは違つていまや金融機関にとつて最も重要な業務は、お取引先さまの販路開拓事業。ビジネスツマ

チンクは銀行の最も華やかな部署になり、やるべき仕事の最大のものになった。さらにインバウンド市場の拡大、政府が進める「地方創生」施策などが後押しする形で記念の10



回を盛り上げてくれる。今年3月に北陸新幹線が開通し、7月にユネスコ記憶遺産に「明治日本の産業革命遺産」が登録され、岩

の出席が急増した。今内容を含め合わせた。近、大手小売グループでは取扱食品全体の約5割を地域食材にシフトしている。クシオンに登場する食品専門バイヤーの行動にも反映し首都圏初紹介といった希少な食材が求められ、食と観光を結びつけた販売方法が注目されている。

## 地方銀行フードセレクション 活性化の力に

手から鹿児島まで8県にまたがる施設が注目を集めている。このチヤンスを生かし、食と観光の両面で地域を発信しようとする佐賀県や長崎県などの自治体「地方銀行フードセレクション」は、これまで、日本は海外に出かけ、海外でものを作るグローバル化に取り組んできた。しかし、輸出の手続きは案外面倒で東南アジアの国々では日本以上に輸入規制をかけている困もある。しかし、インバウンドでは外国人がわざわざ日本に来てくれる、日本のものを買い取ってくれる。中小企業はこれから何らかの形でグローバル化に関与する会社をそうでない会社に二極化し、国内のインバウンド需要を取り込めることは伸び、それ以外は衰退していくと考える。「地方銀行フードセレクション」は企業の方向性や商品化、販路拡大など自社の取り組みを見直す羅針盤としての機能も兼ね備えている。実際に成果を出している出展社は、事前に経営トップとバイヤーの面談を設定するなど見えない努力を重ねている。「地方銀行フードセレクション」は地域の銀行がお取引先企業をサポートするものではないが、自らが率先して考え、動き、成果を獲得する場として活用していただきたい。そこから、地域活性のパワーが生まれると考える。